

「共同利用研究所と地方大学」について

北大埋 堀 淳 一

(4月16日受理)

物性研究3月号p446に勝木渥氏が「共同利用研究所と地方大学」という一文をのせておられる。基研の運営に関する具体的な勝木氏の意見には私はほぼ全面的に賛成であるが、この論文の最後に私の基研研究部員会における発言に対する氏の意見がのべられており、それがいささか誤解にもとづいているように思われるのと、「地方大学の孤立性の打破」に関して氏の意見と私の考えとの間に若干の相違（多分本質的なものではなくニュアンスのちがいにすぎないと思われるが）があるので、私の発言の真意をここで明らかにするとともに、意見を少しのべたいと思うのである。

勝木氏が引用された部員会の議事録には私の発言は

「経験から言って、基研は地方の人にとっても乗りにくいエスカレーターではないと思う。風変りな特殊な研究は地方の人から出てくる確率が大いなので、それをとりあげる努力が必要。」

となっている。これは決して誤りではないが、やや要約しすぎているために、私の言ったことの趣旨が真直に表現されていず、そのために誤解を生んだものと思われる。とくに「風変りな特殊な研究」というコトバが前後の脈絡からきり離されて引用されたために、勝木氏に単なる異国趣味としての評価であると受けとられたらしい。私はこのコトバを「オリジナルな研究」の同義語として使ったのであって、決して単に物珍らしいだけの猟奇的な研究という意味で使ったのではない。コトバの使い方が悪かったのかもしれないが、多分このようないい方になったのは、真にオリジナルな研究というものは最初は「風変りな特殊な研究」と受けとられることが間々ある、という意識が裏にあったのだと思う。「地方大学」の孤立性をそのままに放置しておけば、たしかにそこにおける研究が異国趣味的研究に墮する危険は大いにあり、この意味で孤立性の打

破が急務であることは私も勝木氏と全く同意見であるが、私がいいなかったのは、孤立性のある部分は積極的に利用すればオリジナリティーの母にもまたなり得る、ということであり、地方から芽ぶいてきたオリジナルな研究を育てて、それを日本の物理学研究の或はピークに、或は裾野の沃土にする積極的な役割を基研が果すべきである、ということであった。

こういうことをいうのは大変おこがましく気がひけるが、あえて自分のことを棚にあげていわせていただくなれば、日本の物性物理学会に対する私の最大の不満は、戦後著しく改善されたとはいえ、依然として欧米における研究成果の輸入加工業者という体質を本質的には脱却していないことであり（例外はもちろんあるが、例外をいちいちあげていては話が進まないからゆるしていただく）。別のいい方をすれば、「本邦初演が多くて」、そのため必然的に「今まで日本で発表された物性物理関係の論文を全部地球上から消してしまっても、物性物理の大勢には影響がない」という結果になることである。（この2つのセリフは私の発明ではないことをことわっておく）。日本では他人のやっていることにやたらに左右されずに、自分のペースでドッシリ腰を落着けて、独自の問題とじっくり取りくむ、というタイプの研究がどうも育ちにくいように思われる。しかしこのタイプの研究こそが、真にオリジナルなものを生み出す可能性も最も大きく内蔵している研究であり、日本の物性物理が輸入加工業的性格から脱却するためには、このような研究を大いに育てる必要があると私は考えるのである。

上記の傾向は、他人のことが必要以上気になるわれわれ日本人の一般的性格の結果でもあろうが、万事が極度に中央集権的に出来ており、しかも「中央」では情報が過剰にありすぎる、ということにも少なくとも一因があると思われる。情報が豊富にあるということは学問の発展のために不可欠なことはいうまでもないが、過ぎたるは及ばざるが如く、過剰な情報はかえって雑音になる。オリジナルな研究の芽は雑音が少なく、空気も清澄な地方にかえって育ちやすいのではなからうか。私は決してこのことを「中央」に安住しながら「地方」の田園風景に気持だけあこがれて言っているのではない。勝木氏の定義では北大は「地方大学」ではないが、ここにいると勝木氏の挙げておられる地方大学のハンディキャップのかなりの面が身にしみて感じられることは事実であり、

「中央大学」の中では地方大学的な面を最も強くもっているといって決してウソではないと思う。しかし私は雑音に振りまわされない（あるいは流行を追わない）独自の研究は十分地方でも育てられる（少なくともその条件はある）と思って来たし、これもまた口はばったくて恐縮であるが、主観的には曲りなりにもある程度それを実践的に示してきたつもりである。ただしこれにはその初期において私共の研究が基研によってとりあげられ、論文の上のみでなくて少数ながら全国に散在していた同分野の研究者の間のより人間的な交流が開かれることがほとんど不可欠であった。この意味でまさに地方の孤立性が打破されなければならなかったのである。私の発言はこの体験に基づいたものにほかならない。

以上を要するに、「地方大学の孤立性」は必ずしも全面的に悪ではなく、孤立性を全くなくすことはむしろ「他人のことを必要以上に気にする」日本の風土を地方にまでビマンさせることになりかねない。しかしながら一方、地方から出てくるオリジナルな研究の芽を十分に伸ばして、その日本の物性物理への寄与を極大にするという意味では地方の孤立性を極小にすることは必要不可欠なことであり、それが基研の果すべき重要な役割の1つであろう、というのが私のいいたいことであった。

蛇足ながら、誤解をさけるために念のためにつけ加えるのであるが、私は決して「地方大学の孤立性」をそのまま是認して、それに忍従しながら頑張れという精神主義を鼓吹しているのではない。「中央」と「地方」の格差をなくすことは必要であり、その努力は十分しなければならず、また地方にふき出る芽を圧殺してしまうような過度の孤立性はなくさなければならないが、一方「地方」にいる以上その利点を積極的に生かす努力も必要であり、それがまた孤立性皆無、一律平等に過剰な情報に右顧左ベンする状態よりは物性物理全体にとってもむしろ望ましいことではないかと考えるのである。勝木氏が最後に言及しておられる「地方大学における物性研究の意義」も、私見では少くともその一部はここにあると思う。勝木氏のいわれる孤立性打破ということの意味が、この意義を生かすのに障害になる過度の孤立性を打破するという意味ならば私も全く賛成である。